

第1章

夢も希望も感じられない

子供時代

アルベルト・アインシュタイン (Albert Einstein) は1879年3月14日、ドイツ南部の**ウルム***という町で生まれた。ただし、翌年には一家でミュンヘンに移り、16歳になるまでそこで暮らすのだから、実質的な出身地はそっちだと思う。

なお、ちよつと古い資料では名前が「アルバート」になっていることが多い。最近になってアルベルトが主流になったのは、「アルバートは英語式の読み方であり、アインシュタイン博士はドイツ出身なのだから母国語の読み方に合わせるべきだ」という意見が大勢を占めたからだろう。このごろは外国人の名称はできるだけ母国語の発音に従おうというムードがあるので、こういった書き換えが進んでいるようだ。

もつとも、Albertをアルベルトと読むのはドイツ語でも特殊な発音で（オペラや古典演劇などで用いられる舞台発音と呼ばれるもの）、口語ではアルバートのほうが近いらしいから（強いてカタカナにするならアルベアト）、このあたりの匙加減はよくわからない。まあ、こんなところで足踏みを続けていても話が先に進まないの、ここでは長いものに巻かれ、アルベルトで統一することにしよう。その他、彼の名前に関するどうでもいい雑学は**注釈*****にまとめておいた。**

なお、当然ながら家族みんながアインシュタイン姓なのだから、子供時代のことを書くときにはアルベルトとすべきなのかもしれないが、本の途中で呼び方が変わるのもおかしいので（タイミングがわからないし）、本書では「アインシュタイン」に統一する。

アインシュタインにとつての母国がドイツであるのはたしかだが、ただ、それを強調したからといって本人が喜んでるかどうかはわからない。

ドイツが統一国家を成立させたのは1871年と、アインシュタインが生まれるわずか8年前のことだ。日本が明治維新を経て近代国家としてスタートするのが1868年だから、実はそれより遅いのである。

そのころ、西ヨーロッパの主要国はとつくに統一を成し遂げ、近代化への道をまっしぐらに突き進んでいた。フランスは10世紀にはすでに単一の王国となり、1789年の革命によっていち早く共和制をスタートさせた「先進国」だったし、イギリスも10世紀の統一で生まれたイングランド王国を主体に1707年にはスコットランドとの合邦を成功させて強固な連合王国を築いている。出遅れていたイタリアですら1861年に統一王国が誕生しているのだから、ドイツだけが取り残された格好だ。

それでは、統一前の「ドイツ」がどんな状況だったのかというと、領邦国家と呼ばれる**君主制の半自立地域**に分かれていて、一応、ドイツ人としての緩やかなナショナルリズムはある。ようだが、**同じようにドイツ語を話すオーストリアとその支配地域**がそこに含まれるかどうかは明確ではなく、要するにドイツという概念は、まだ完全には固まっていなかったのである。

そんな分裂した状態でも、中世を引きずっていた19世紀半ばごろまではなんとかなった。

最速の輸送手段が馬である時代なら、細かく支配地域が分かれていても、物や情報の流通にそれほど支障はなかったからだ。ところが、イギリスで始まった産業革命の波が大陸にも押し寄せてくると、いろいろ問題が起きてくる。

たとえば、ある会社が「ドイツ」の広いエリアで蒸気機関車による鉄道網を構築しようと思っても、領邦国家ごとに法律や制度、さらには政策や権力者の思惑などが異なっていると、線路を延ばそうとするたびにそれぞれの政府と交渉しなければならず、面倒臭いだけでなく投資効率が悪くなってしまう。ただでさえイギリスやフランスに比べて遅れているのに、これではますます差が広がっていくばかりだ。産業投資家（ブルジョワジー）たちの不満は急速に高まっていき、そんな気運に応えるかたちで最有力国家だったプロイセン王国による「天下統一」が成された結果、ようやく誕生したのがドイツ帝国だったのである。

遅いスタートとなったものの、首相であるオットー・フォン・ビスマルクの鉄血政策によって富国強兵への道を突き進み、あつという間に列強の一角を占めるようになっていくのはさすがだ。ところが、もともと多様な文化や風習の残る寄せ集めの国で強引な統一政策を進めたことにより、地域によっては大きな反発を招く。その中心地のひとつがミュンヘンだった。統一を主導したプロイセンはベルリンを首都とする北ドイツの国であり、ミュンヘンのある南ドイツのバイエルンとはかなり隔たりがある。バイエルン人は民族的にはオーストリア

人の大部分と重なっており、比較言語学ではバイエルン・オーストリア語圏と同一のカテゴリーに分類されてしまうほど文化的には近い。同じ「ドイツ人」でもプロイセン人との共通点のほうが少ないくらいだ。

プロイセンとバイエルンについてステレオタイプな特徴付けをするなら、プロイセンが「足並みを揃えてみんなで同じ方向に進もう!」という猪突猛進型の社会なのに対して、バイエルンは「個性も大事だから、のんびりいきましよう」といった悠々自適型の社会になる。プロイセン側からみれば「バイエルンのやつらは田舎者で、ビールとソーセージさえあれば満足している」「保守的でいつまでも古いものにしがみついているから宗教改革があったのにカトリックのままだ」と馬鹿にされるのだが、バイエルン側から見れば「**プロイセンの全体**



主義は怖い」「国が豊かになつたり強くなつたりするのはいいが、そのために個人が犠牲になるのはまっぴらだ」となる。まあ、似たような文化的差異は世界中どの地域にもあるので（日本の東京と大阪とか、東京の山の手と下町とか……）、これ自体はそんなに驚くことではない。

重要なのは、アインシュタインが生まれたばかりのドイツは統一間もない「生乾き」の状態だったということだ。それなのに、近代化を急ぐプロイセン流のやり方がバイエルンにも徐々に浸透していき、社会は不穏な空気に満ちていく。少年時代のアインシュタインは町中で頻繁に行われる軍事訓練の行列に嫌悪を示したと伝えられており、これについて多くの伝記本では「博士が貫いた平和主義のルーツがここにあるのです！」といった方向付けをしたがるのだが、そのころの彼の感情は平和主義というよりもバイエルン人としてのプロイセンへの反発のほうが強かつたのではないかと思つている（ただし、ミュンヘンにも強いドイツに憧れて富国強兵策を支持した人は大勢いたので、それに染まらなかつたのはアインシュタインの個性の萌芽だとはいえるのだが……）。

後述するように、アインシュタインは16歳のときにスイスの学校に入ると、すぐにドイツ*国籍を捨ててしまう。そして22歳でスイス国籍を取得してからは死ぬまで手放していないのだから、公的にはずっと「スイス人」のままだ。